

『転換期を迎える大学教育』に関するレポート

作成者：Ritter Diaz、ビジネスコンサルタント

東京、2021年6月24日

私が大学で法律と政治学の勉強を始めた1980年代半ば、大学の学部図書館や中央図書館では、さまざまな教養課程に関する最新の情報を見つけることはそれほど容易ではありませんでした。学生は、教授が講義のために作成したメモやプリント、そして旧版の本に頼るしかなく、また、最新の出版物や法律・政治問題に関する研究が掲載されている雑誌もほとんどありませんでした。これが公立で資金が乏しい大学の現実であり、独裁政権の末期に暮らしていた私のような低所得の法学部学生の現実でもありました。

最新の書誌情報へのアクセスは限られていましたが、質の高い法律学者に法律と政治学の基礎を教わることが出来たのは、私にとって幸運なことでした。私がよく覚えているのは、裁判官としての経験を持つ刑事訴訟法の教授です。刑事訴訟法の様な特に重要な科目は、彼のような学術的権威を備えている教授が担当すべきだと考えます。彼の授業は、実際の法務を担当する前に必要な法原則の知識を織り交ぜたもので、彼が学生に課す試験はすべて、パナマの裁判所で扱われた実際の司法事件に基づいたものでした。確かに、卒業時には、彼の学生は法曹界で即戦力として活躍できるようになっていました。

私の意見としては、その教授は、学生に専門分野の理論的な原理を教えるだけにとどまらず、労働市場で生き残るための実践的なツールを提供するために、大学教育がどのように行われるべきかを示す素晴らしい例と言えます。残念ながら、すべての教授が本気で学生と向き合い、彼らがおのち、充実したキャリアを送れるように指導できる情熱を持っているわけではありません。事実、近頃は多くの大学教授がその使命感を失っており、学生が将来のキャリア発展のために役立つ具体的なスキルを学んでいるかを気にすることもなく、ただただ、与えられたスケジュールの中で授業を行うことに専念しているように見受けられます。

しかし、1990年代半ばにインターネットが登場すると、場所や時間を選ばずに誰でも最新の情報にアクセスすることが可能になりました。小学校から大学まで、教師も学生も、仕事や勉強に必要な情報収集のツールとしてインターネットを使い始めたのです。そして現在、講師がいなくても様々な科目を教えられるコンピュータプログラムが設計され、プログラム自身がインストラクターになれるようなレベルにまで達しています。このように、インターネットは教育の分野にも大きな可能性をもたらし、オンライン学習は実用的な知識を得るための新たな手段となりました。

さらに、ウェブ上では指導動画(ビデオチュートリアル)が人気を博しています。チュートリアルは、本や講義とは異なり、人々が特定のタスクを実行できるように、実例を挙げながら対話的に教えることを目的としています。ビデオチュートリアルでは、数百万人もの人々にブログやホームページの作成・管理方法を教える、日記を書く、教科を教える、記事や意見を発表する、商品やサービスを販売するなど、さまざまな目的に応じたスキルが提供されています。

同様に、Zoom、Google Meet、Microsoft Team などの新しいプラットフォームは、COVID-19 によって引き起こされたソーシャルディスタンスという考え方のもと、専門的なビデオ会議、ビジネスミーティング、大学での講義などにすでに広く利用されています。実際、これらのプラットフォームは、パンデミックの後も成長を続けるでしょうし、仕事をこなすために、あるいは市場での競争力を維持するために、特定の専門家だけでなく、公的機関や民間企業で働く人々も、このオンラインツールを習得する必要があるでしょう。

実際、この新しいオンラインの波は、世界中の大学に大きな変化をもたらしており、特にアングロサクソン諸国では、オンラインコースが何百万人もるの学生や専門家の新しい学習方法となっています。ハーバード大学、ケンブリッジ大学、スタンフォード大学、マサチューセッツ工科大学などの有名大学では、COVID-19 が流行する前から一般向けのオープンオンラインコースを実施しています。同時に、アマゾン、マイクロソフト、グーグル、IBM などの大企業は、自社の技術（クラウド、AI、IoT など）をビジネスやその他の場で、どのように活用するかを教えるために、国内外の聴衆向けにオンラインコースを提供しています。ここでは大学、企業名を数社しか挙げていませんが、実際にはもっと多くの大学、企業がオンラインコースを導入しています。

大学での教育手段が変化しているだけでなく、大学と競争するために新しい組織が教育分野に参入していると言う事実を、私たちは目の当たりにしています。このような競争の中で、多くの大学は教育市場で生き残るために様々な方法で自らを変革する必要に迫られています。

このような状況の中で、大学は、国内外で聴講されているコースをサポートするオンラインプラットフォームを確立する必要があります。国によって時差があり、異なるタイムゾーンの学生が受講するコースでは、時間割りを正確に構築し、ハッキングや不正な傍受を防ぐためのシステムを提供する必要があります。

また、短期間でも知識や技量が習得できるようにコースは進化しており、学生が社会へ出た際に即戦力となれるよう、また、社会人の新しいスキルの育成を目的とした、より実践的な授業が行われています。

従来のシステムでは、学生は大学生活に 4 年という長い年月を費やしていますが、卒業後、社会へ出てすぐに特定の仕事をこなせるような実践的なスキルは身に付けていません。そのため、企業は新入社員へ新たにトレーニングを行い、さらには文章力を強化する必要すらあるのです。その結果、他の組織が提供する実践的な短期オンラインコースは、付加価値の高いコースとして、学生や専門家を魅了しています。

オンラインコースを始めるにあたり、教員や管理スタッフは、オンラインプラットフォームの利用に関する適切なトレーニングを受けなければなりません。教授は、教材をアップロードして配布したり、学生のテストや課題を適切に評価できなければなりませんし、学生も、プラットフォームの使い方について適切な指導を受け、成績などの学業情報をオンラインで受け取ることが出来なければなりません。

この他、英語圏以外の大学では外国人学生に講義を行うために、教授には十分な英語力が求められます。同様に、大学の国際関係を管轄する部門のスタッフも、国際的な学術プログラムを管理するためのコミュニケーション能力を備えたバイリンガルでなければなりません。

また大学にとっては、学術研究のプロセスを社会の生産力と結びつけるために、企業との協力体制を構築することも重要です。この点で、大学は社会経済的プロセスをよりよく理解することができ、その結果、学生が労働市場で良い結果を出せるように準備することができるのです。

日本では、各大学が伝統的なシステムから新しいオンライン時代への移行に尽力しており、上智大学のようにシラバスに英語コースを取り入れたり、千葉大学では民間企業と提携して学内のカフェテリアでパナマコーヒーを提供したり、学生の国際交流を促進する機会を拡大するために海外の大学と連携して学生に英語の短期オンラインプログラムを提供したりしています。

またパナマでは、パナマ工科大学が外国人学生に英語でオンラインコースを提供したり、学生の雇用機会を増やすために社会と密に連携するなど、先進的な大学経営を行っていることがわかりました。

確かに、パンデミックの影響がなくなれば対面式の授業は復活すると考えられますが、これからはオンラインツールを使ってそれらを補完する時代が到来し、学生、教員、管理スタッフはそれらを上手く使いこなせるようにならなければなりません。

この転換期において、先見の明のあるリーダーシップを持つ大学は新しいデジタル時代に適応することで生き残り、古い方法に固執する大学は自然に消滅していくでしょう。

訳：畑田紋奈